

「信じることで得る力」

使徒言行録27章13～26節

聖学院大学 キリスト教センター主事 久保哲哉

皆さんに一つ、質問があります。皆さんにとって「人生で一番頼りになるもの」は何でしょう。本日は全学礼拝のレポートのために出席している人が多いと思います。どうぞ、それぞれ一人ひとりが「人生でもっとも大切なもの」はこれだ！と思うその理由も添えてレポートに書いてみてください。それで、これから「聖書が語る」「頼りになるもの」を紹介しますので、レポートの中で比べて、感想を書いてほしいと願っています。きっとよい評価がつくでしょう。

この質問は 100 人に聞いたなら、答えは 100 通りあってよい。そのような質問だと思います。不正解はありません。高尚な答えとしては「愛」とか「絆」とかという人もいますでしょう。また「お金」という人だっているでしょう。それはそれで尊い答えです。ただ「ない」というのはやめましょう。人生において頼るものが「ない」と、社会に出てから苦労します。一人で生きていくことができる強い人はそれでいいと思うのですが、何を頼りとしているかでその人の粘り強さが変わります。ですから何か一つ。これというものを挙げて欲しいのです。この大学生活において「これに頼れば大丈夫」というものを見つけていただきたい。そう願っています。

さて、聖書の話です。今日は「使徒言行録」の27章が開かれました。いきなり終盤。クライマックス感が強い場面を読んできましたが、あらずじはこうです。

使徒言行録の主人公である使徒パウロ(イエス様の弟子のことを「使徒」といいます)がエルサレムからローマへの船旅の途中、嵐にあいました。

最初、おだやかな南風がふいてきましたので、目的地のローマまで順調に進むと思われましたが、人間の計画というのはなんとまくいかないことの多いことか。まもなく「暴風」が船を襲ったようです。そのときの様子が 20 節に書かれていますのでを再び読みましょう。20 節。「幾日もの間、太陽も星も見えず、暴風が激しく吹きすさぶので、ついに助かる望みは全く消えようとしていた」とあります。

2000 年前当時の船旅では「太陽や星」を道しるべに進むということがあったようです。ですから、太陽も星も見えず、行く先がわからない。暴風が吹き荒れる中で「助かる望み」がまったく消え失せようとしていたということでしょう。このような状況の中、パウロは驚くべきことを語るのです。

「しかし今、あなたがたに勧めます。元気を出しなさい。船は失うが、皆さんのうちだれ一人として命を失う者はないのです。」とんで 25 節「ですから、皆さん、元気を出しなさい。わたしは神を信じています。わたしに告げられたことは、そのとおりになります。わたしたちは、必ずどこかの島に打ち上げられるはずです(使徒 27:22)」

今日は時間の関係でここまでしか読みませんでしたけれども、このパウロの言葉を信じた人々は「一

同で食事をして」「元気づけられて」目的地であるローマへ向かっていくのです。それまでは心配で食事がのどを通らなかった人々が、パウロが語る「神の『希望』の言葉」を信じた結果、元気づけられて絶体絶命の状況が打開されていくのです。

聖書が語る「もっとも必要なもの」。それは「神よりの希望」といいよと思います。すべての人を元気づける「神よりの希望」。今日はみなさんにこの希望を紹介したいのです。

教会で牧師をしていると、この「神からの希望」によって元気づけられている方々を何人もこの目で見てきました。このパウロが体験した奇跡。これは 2000 年前のおとぎ話ではないのです。2000 年後の今も、信じる者に起こり続けている奇跡なのです。牧師をしていると、そのことがよくわかります。

信徒の方をお見舞いに行ったときのことで。末期のすい臓ガンで入院していたのけれども、ある日、病室を訪ねていくと、ベッドの上で正座をして、背筋を伸ばし、聖書を読んでいるところに出くわしたことがあります。今思うと聖書にちりばめられた希望の言葉から「病(死)」に立ち向かう勇気をもっていたのだらうと思います。

牧師はパンとぶどう液で聖餐式を祝い、「また来ます」と約束をして帰ります。最後に会うのは葬儀(葬式)のときです。「ついに助かる望みは全く消えよう(20 節)」している葬儀の際にあっても神の愛と祝福を語るのが牧師の仕事です。それまで悲しみに暮れていた遺族の方が顔を上げてくださる。悲しみと絶望で下を向いていた方が前を向くようになる。これは聖書が語る希望のゆえです。

また、ある方は末期の肺がんでホスピスに入っていましたけれども、悲しみの極致にあると人は顔を見られなくなるのです。かける言葉が見つからない。けれども聖餐の準備をしてきましたというと顔を覆っていた手がほどけるのです。そして共に祈りあい、帰路につきます。その方が天に召されて祈りにいくと、看護師さんたちから声をかけられ、死の直前まで看護師たちの労をねぎらい、感謝を表し、励まされましたと教えられたことがありました。天に召された前日には80歳オーバーの仲良しの友人たちと天国の讃美歌を歌って、天国ってどういうところかなと笑いながら話していたとも聞きました。牧師でありながら、キリスト教って「すごい」と思った瞬間でした。人間の最大の敵である「死」ですら打ち勝てない希望が聖書にはあります。信じるものは救われるというのは本当のことです。この「神が必ず救い出してください」「神が必ずよいように導いてくださる」という「目にはみえない」「まことの希望」を人生で最も大切なものに推したいのです。このまことの希望に魅力を感じたら是非、日曜は教会へ行きましょう。あなたの人生がまことの希望によってよりよいものになるでしょう。祈りましょう。

天の父なる神よ。あなたの御名をたたえます。この希望がなく呻く時代のただ中で、あなたと出会い、本当の希望を示されたことに感謝をいたします。

人はまことに希望がなければ生き生きと生きることができません。どうかこの時代にあつて希望のなさを、生きにくさを覚えているものがありましたらあなたの御言葉が臨んでくださいますように。あなたを信じ、元気づけられるものが一人でも多く起こされていきますように。導いてください。愛する主イエス・キリストの御名によって祈ります。

2018 年 7 月 3 日 聖学院大学 全学礼拝